

報告書

企画名 【躍動する南アジアのポピュラー音楽の諸相】

企画責任者 【井上春緒（キングスカレッジ・ロンドン）】

アドバイザー 【岡田恵美（国立民族学博物館）】

日時【2022年12月11日（日曜日）午後1時より午後5時】

場所 【オンライン開催】

プログラム【各報告者氏名（所属）報告者タイトル、要旨】

13:00~13:05 オープニング（フィールドネットからの挨拶）

13:05~13:10 開会の挨拶・趣旨説明 井上春緒（キングスカレッジ・ロンドン）

13:10~13:30 軽刈田凡平（音楽ライター）

タイトル「レペゼンされる重層的なアイデンティティ」

要旨：「レペゼン(represent)」はヒップホップカルチャーにおいて重要とされるコンセプトである。自分の出身である地域やコミュニティを「代表」して、ラッパーたちは、誇りを見せつけ、問題を指摘する。宗教・言語・民族・地域・カースト・教育レベルなどによって、人々が多層的なアイデンティティを持ちうるインドで、ラッパーは何を「レペゼン」しているのか。ほとんどの場合、彼らは世界中の多くのラッパーたちと同様に、生まれ育った街やストリートについてラップすることが多いが、複雑なアイデンティティを曲によって使い分け、様々な切り口で表象する場合もある。発表者は、オディシャ州プリー出身で、現在はベンガルールを拠点に活動している日本人の母親とインド人の父親を持つ Big Deal を例に、彼がレペゼンする多様なアイデンティティの重層性を、実際の曲を例に挙げながら分析した。

13:30~13:50 拓徹（大阪大学）

タイトル「『自由レコード』の軌跡：インドにおけるヒップホップと政治」

要旨：2017年に創設されたインドのヒップホップレーベル「アーザーディー・レコーズ」（Azadi Records、訳すと「自由レコード」）は、Prabh Deep、Naezy、Seedhe Maut など多数の人気ラッパーを擁し、現代インドを代表するヒップホップレーベルの一つとして、近年のインドにおけるヒップホップブームを牽引してきた。しかし同時にこのレーベルは、その名に「自由」（Azadi）の語を冠することからも分かるように、高い政治意識を持つインディペンデント・レーベルでもある。本発表では、同レーベル創設者へのインタビューの成果を中心に、インド現代政治史の観点から同レーベルのこれまでの軌跡を捉え直し、その意味について考察した。

13:50~14:10 井上春緒

タイトル「国境を超えて繋がる南アジアのインディペンデント音楽」

要旨：インドでは、90年代初頭まで、映画産業から独立したポピュラー音楽の活動は限定的にとどま

った。しかし、90年代からのインターネットの普及や Youtube、SNS 等の発展により、近年インド本国におけるインディペンデント音楽は活況を呈している。本発表ではそのような状況下で、英国における西・南アジア系音楽家とインド本国におけるインディペンデント・レーベルで活動するアーティストのコラボレーション活動に焦点を当て、国境を超えて繋がるエイジアン音楽の影響関係について発表した。具体的には、ムンバイ在住のラッパー Mc Mawali、Bandish Projekt、在英インド人アーティスト Sarathy Korwar や Last Mango In Paris の活動に焦点をあて、そのトランスナショナルな音楽性について考察した。

14:10~14:20 質疑応答

14:20~14:40 休憩

14:40~15:00 佐々木美佳（映画監督）

タイトル「劇中歌から見えるベンガル語ポピュラー・ソングの世界」

要旨：映画と音楽は密接な関係を持つ。詩歌文化が盛んなベンガル語の世界で制作される映画にはかなりの確率でベンガル語の劇中歌が挿入される。インドの巨匠サタジット・レイのフィルムから、2022年にバングラデシュで公開されたインディペンデントの映画作品まで、歌はベンガル語映画の中で重要な役割を果たしている。劇中で歌われる歌は、タゴール・ソングやバウル・ソングといったベンガルの伝統的な音楽から、ヒップホップ・ソングまで、多種多様である。さらに現代では歌そのものが youtube を介して広まることで、映画そのもののヒットにも一役買っている。

本発表では、ベンガル語映画の新旧作品を例に取り上げながら、ベンガル語の歌が映画の中でどのように歌われるのか分析した。そして劇中歌が映画の受容やヒットを伴いながら、ポピュラー・ソングとなっていく様子をたどった。

15:00~15:20 岡田恵美（国立民族学博物館）

タイトル「音楽とともに生きるナガー紛争地域からインド・ロックの首都へ」

要旨：「インド人ではなく、ナガなんだ！」ミャンマーとの国境に位置するインド北東部ナガランド州には、モンゴロイド系のキリスト教徒であるナガ (Naga) が多く暮らす。インドという大国の東端で、ナガは半世紀近くもインドからの分離独立を標榜する闘争を続けてきた。これによって地元経済の停滞や若者の流出が進み、社会の閉塞感からドラッグや HIV の蔓延といった深刻な問題も抱えてきた。2000年代に入り、紛争地域というイメージからの脱却や地元経済・文化の復興を目的とした地域振興政策が活発化した。特にポピュラー音楽文化の脈絡では、2004年に州政府の音楽振興局が設立され、インド初のポピュラー音楽振興政策が推進されてきた。その結果、「インド・ロックの首都」とも評されるような大規模なロック・フェスの開催やミュージシャン支援活動が活発化し、音楽産業や音楽教育産業が萌芽した。本発表では、ナガ社会における教会音楽の浸透や、南アジアでは稀少なポリフォニーの伝統歌唱文化を彼らが継承してきたことにも着目し、ナガの音楽文化の特殊性について考察した。

15:20~15:40 村山和之（和光大学）

タイトル「トランスするイスラーム聖者の歌、その出自をめぐって」

要旨：パキスタンに出自を持ち南アジア諸国で共通するポピュラーソングとして、誰もが知る歌「ダマードム・マスト・カランダル」。インド人もパキスタン人もそのメロディーの圧倒的な秀逸さゆえに、歌詞を代え、アレンジを代えてもなおこの歌を躊躇なく愛してきた。インド人もパキスタン人もパンジャービー語で歌われるその歌を、歌詞中にみられるイスラーム聖者礼賛の宗教歌謡起源だと思っていた。民謡起源のスーフィー儀礼歌謡なのか、スーフィー詩人の聖者礼賛詩がカウワーリーに伝えられて、いまなお歌い継がれているのだろうか？この歌の第一句「おお、ラール・メリー・パト（愛しき聖者様、わが名誉お守りください）！」を聴くときの熱狂は国境を越えて人々を一つにしてしまう。本発表では、誰がいつ作ったか、誰もそんな疑問符を投げかけぬほど定着し愛されてしまったこの歌に敬意を払いつつ、あらためてその出自を問うた。タゴールでもなくイクバルとカウワールの歌でもない、ラホールの映画音楽家と不遇の天才詩人の奇跡の出会いから生まれたこの歌について考察した。

15:40~15:50 質疑応答

15:50~16:10 コメント 岩谷彩子（京都大学）

16:10~16:55 総合討論

16:55~17:00 閉会の挨拶 井上春緒

総評【企画の狙いと成果、今後の課題や活動計画】

本企画の狙いは大きく分けて二つあった。ひとつは、現在の南アジアのポピュラー音楽文化について目を向けることである。これまでの南アジアのポピュラー音楽の研究は、映画音楽、或いは海外の南アジア系移民アーティストに関するものが主流であった。しかし、本企画では近年活況を呈するインドのヒップホップシーンや、パキスタンやナガランド、コルカタ、バングラディシュにおける、ポピュラー音楽の現状に焦点を当てている。ポピュラー音楽が時代の世相を反映しているのであれば、我々同時代に生きている者は、そこに注目することで南アジアの文化をより深く理解することができるのではないだろうか。

もう一つは、領域を超えた研究の場の構築である。具体的には研究者だけでなく、音楽ライターや映画監督にも発表してもらうことで、南アジアのポピュラー音楽文化研究の裾野を広げていくことを目指した。日本には、南アジアの古典芸能や舞踊、映画関係者など様々なジャンルに造詣が深い人々がいる。そのような人々が交流し、議論する場があれば、本地域の音楽文化的価値に対する認識を広めていくことにつながるのではないだろうか。本企画を考案した当初から、学際的で多様な聴衆が満足できるような、開かれた「場」をワークショップという形づくりあげることが目標とした。今回はオンラインでの開催となったことで、普段は学術的ワークショップに興味を持たない人々も、手軽に参加でき、それぞれの経験と照らしあわせて、知的好奇心を刺激することになったのであれば、ある程度目標は達成できたと考えている。

さて、成果については、評価すべき点と改善すべき点がある。まず評価すべき点については、登壇者の話が多岐にわたり内容が非常に充実していた点、そしてオンラインでの開催であったので映像や音楽

を鑑賞しやすかった点、コメンテーターの岩谷彩子氏が、示唆的な疑問を投げかけたことで議論が深まった点である。岩谷氏は、近年の音楽社会学の議論を踏まえた上で、ポピュラー音楽が聴衆との関係や、アクターとの関係によって変化するものと捉え、その上で南アジアのポピュラー音楽文化の独自性、或いは可能なつながりや創造性についてそれぞれの登壇者に質問を投げかけた。本ワークショップは近年の音楽シーンについて各自が思い思いにまとめたものだったので、どうしても共通の議論の基軸が弱くなったことは事実である。そのため、岩谷氏のコメントは本ワークショップを包括し、その方向性を示唆するものとなった。

改善点としては、言葉の定義についてである。題名にもある「ポピュラー音楽文化」や「インディペンデント音楽」、「インディーズ音楽」といった言葉の使用が恣意的で、意図するジャンルやインド音楽全体の中での位置付けが曖昧であった点が、不親切であったかもしれない。今後は前提となる言葉の定義を事前にまとめておくなどの工夫が必要であろう。また、登壇者同士がワークショップまで議論を重ね、言葉の定義や議論について意見交流をしておくべきであった。

本ワークショップは多様性に富んだものであり、本研究テーマに関して、さまざまな可能性と課題を示唆するものであった。一方、まとまりに欠けていた部分があったことは否めない。今後、この点については十分に考慮して、本研究のさらなる発展をめざしたい。

最後に今後の活動計画について述べる。本ワークショップの発表者とは、今後もポピュラー音楽に関するワークショップや研究会等を重ねていくことで、本テーマ研究を深めていく。定期的集まれるような研究会の開催や、他研究領域との共同研究の場を構築することを目指す。最終的には、南アジアの音楽文化全体についての人々の理解を促し、本地域の音楽文化研究の発展に貢献したい。